

台湾の夢二——最後の旅

ひろた まさき

目次

はじめに

1. 夢二と武二

2. 台湾の美術界

3. 夢二のメッセージ

おわりに

はじめに

竹久夢二は、明治末から大正期にかけて、一世を風靡したマルチアーティストである。絵画を中心に、デザインや手芸品に新風を巻き起こし、日本社会の美意識に革命をもたらした。夢二については、天才という評価とともに、アカデミイの訓練を受けていない画家として蔑視されたり、女たらしのぐうたらとみなされるなど、その評価はさまざまであるが、その彼を突き動かした思いについては必ずしも十分研究されたとは言えない。夢二は若いころから西洋文化に魅かれ、西洋と日本の伝統を融合させようと努力してきたが、彼が初めて西洋世界を訪れたのは 1831 年、47 歳のときである。アメリカに 1 年 5 ヶ月、ヨーロッパに 10 ヶ月滞在し、33 年 9 月に帰国。そしてその直後に台湾を訪ねたのである。

異国の体験、それも壮年になっての様々な異文化社会での生活は大きな刺激を与えた。アメリカでは日本移民が差別されていたし、ヨーロッパではナチスと出逢ったが、台湾では現地民を差別する日本を見る。それはグローバルな世界の連鎖の中の地域的差異との出会いであったが、夢二の立ち位置も変化し、そして彼の思い（思想）も変化していったと思われる。彼はこの 3 年足らずの異国への旅から何を発見し、それは彼に何ををもたらしたか。それをここでは最後の旅、台湾に焦点を当てて検討したい。短かったとはいえ、この初めてのアジア植民地での体験が彼に何も発見させなかったはずがない。欧米を回って最後に自国の植民地に出会って、初めて世界のなかでの人々の立つ姿が見えたのではないか。台湾帰国後 10 か月で彼はあの世に旅立ったので、この異文化経験が彼の創作に与えた影響をたどることは困難であるが、

彼が到達した思想的地点を探ることは、現在私たちが帝国意識に囚われている世界を相対化し、自己解放をはかる課題に通じるのではあるまいか。

* * *

1933 年 9 月 18 日にドイツから帰国した竹久夢二は、旅の疲れを癒す間もなく、河瀬蘇北に誘われて台湾に出向いた。2 年前の渡米の際には、アメリカへ行けば日本人移民がいるから絵が売れる、それを資金にパリに行けばよいという翁久允に誘われた。翁久允はその前は 18 年間アメリカで新聞記者をしていたが、親の事情で日本に帰り『週刊朝日』の編集者になった。小説も書く彼の本の装幀を夢二がやったことがあり、『週刊朝日』の挿絵も描いている夢二としては、心強いガイドであった。その渡米したときに似て、ドイツから帰国後の生活費にあてる貯金もなかった夢二にとって、台湾へ行って講演や絵を売って旅をしてはどうかという話は魅力的であった。それまで国内旅行では、いつも旅先での展覧会やファンに囲まれて、絵が売れたので豪勢な旅行ができたという経験もある。不景気のせいもあってアメリカやヨーロッパでは絵はさっぱり売れなかったが、日本の植民地である台湾では事情が違ってくるのではないかという期待がある。翁と同じように蘇北の誘い話が巧みだったし、なによりも、夢二は欧米旅行で借金をつくってその返済のめどが立っていなかったのである。夢二の台湾行については、ヨーロッパから帰国した時に大変疲労していたので南国の台湾で保養するのが目的であったという説もあるが、檜原雄一「夢二はなぜ台湾に行ったのか—友からの借金に悩んだ日々」¹は、夢二が友人である岡山の星島儀兵衛からベルリンへ 500 円という大金を送ってもらって、翌年 1934 年の 1 月末までに返済するという借用書を書き送っており、友人に義理堅い夢二はその返済を大変気にしていた、それが台湾行の直接の動機だとしているが、最も説得的な説であろう。夢二は台湾に特別な関心があったわけではない。

その年 10 月 24 日に神戸港を発ち、26 日に基隆

¹ 『西日本新聞』1999 年 11 月 12 日。

港に着いた。夢二と蘇北は早速、『台湾日日新報』（以下『台日』と略称）の記者からインタビューを受けた。その時の蘇北の自己紹介は、「東方文化協会」の理事長として台湾支部を設立するためにやってきたこと、その協会は日本全国で千人ほど、台湾には百人ほどの会員がおり、「事業としては海外知識を内地在住者に普及すること、内台融和の充実、其の他」であると言うのであるが、あやふやでその実態はかなり怪しい。蘇北は1931年に『新満蒙論』（この本の装幀を夢二がした）を出していて、アジアについてかなりの知識を持った評論家でもあった。協会は大阪・九州・満州・上海に支部をおき、大日本帝国のアジア政略を支援するために相当大規模な文化活動の展開を目指していて、台湾にも「純文化的な施設」を設けると言い、今回は協会の台湾支部を設立し、設立記念の式典とともに、夢二にも話をしてもらう講演会を企画している、夢二の滞欧作品の展覧会も開く予定だと宣伝している。現に11月3日には、台北の医専講堂で講演会が開かれ、蘇北は「東方文明の時代」、夢二が「東西女雑感」と題した話をしているが、その内容は分かっていない。

夢二の入港時の「談話」についてはあとで取り上げることにしたいが、この時の『台日』記者の紹介は「古い記憶に残る画伯」という失礼とも言えるもので、夢二ブームが去って久しく、かつ戦時の非常時にはふさわしくない美人画画家ということへの記者なりの反発・蔑視があったのかもしれない。さらには、ちょうど秋の展覧会の季節で、台湾も各派の展覧会でにぎわっていたから、そうした雰囲気比べて夢二は古いという記者なりの思い込みがあったとも考えられる。

夢二の展覧会は11月3日から5日までの3日間、台北の警察会館で「竹久夢二画伯滞欧作品展」という看板で開かれたが、同時期に開かれた台湾美術展覧会（以下「台展」と略称）が10日間開かれて「来館者2万余人の盛況」と報ぜられ、そのあと台中・高雄へと移動展が開かれるという報道の雰囲気の中に、夢二展は埋もれてしまった観がある。警察会館という場所も夢二にはふさわしくなかったし、台湾人（現地住民をさしあたって「台湾人」と称することにする）にとっては入りづらい空間であったろうことは容易に察しがつく。しかし『台日』の批評は、「時代の潮に姿を没したか

に思はれてゐたが、此画家が持つ昔ながらの「人間情熱」は、まだ作品の上にまざまざと生きてゐる」と好評であったし、入場者もまずまずであった。しかし期待した歓迎の夢二ブームは起こらなかった。

夢二の台湾での行動軌跡は、展覧会が終わる5日まで蘇北と一緒にいたようであるが、そのあとは分らない。講演で高雄まで行くと蘇北は宣伝したが、夢二が動いた気配はない。藤島武二が10月末に来台して台湾各地を回っていて、夢二が来たと言うのでホテルに呼んで話をしたようだが、それについては武二の回想記があるだけである²。その件については後述する。それ以外には、夢二の行動は不明である。彼は船に乗り遅れて帰国を数日のぼすことになり、『台日』にエッセイ「台湾の印象」を書き送ったあと出港、11月17日に神戸港に着いた。

以上が夢二滞台の概要である。20日ばかりの短い滞在で、しかもその間の夢二に関する記録がきわめて乏しい。この期間の日記や書簡がすっぽりと欠けている。筆まめな彼が日記や手紙を書かなかったはずはないと思うが、実際に疲れていて書く意欲をもたなかったのか、書いたけれども紛失したか自分で処理したのかもしれない。もっとも、夢二は大事件が起こったときでも、日記を書くとは限らない。彼は日記を人に見られることを予期して書いているところがあり、大事なことほどむしろ書くことを拒否している気配がある。大逆事件については事件後刑事に尾行されていることだけ書いて、事件そのものには触れていない。幸徳らが処刑された時に友人たちとお通夜をしたが、そのことも書いていない。関東大震災時にはスケッチは沢山しているが、日記ではメモ風の記述があるだけで、彼の感情や思考を正面から書き記すことはしていない。彼と親しかった山本宣治が暗殺された1929年の事件にも触れていないのである。

台北で夢二ファンの日本人女性と会って彼を喜ばせたというエピソードは武二の回想であるが、このほかにはこれといった痕跡は見えない。もちろん台北の街を遊歩したであろうし、他の展覧会を観に行ったに違いない。台北近郊の有名な景勝

² 『書窓』第3巻第3号（夢二追悼特集号）1936年8月。

の地を訪れただろうし、スケッチくらいはしたであろう。そういうことは想像できるが、夢二の病ともいべき遊郭通いは、財布の中身が乏しかった、というよりもその気力がなかったのではないかと思われる。彼の発言として残っているのは『台日』紙上に紹介された入港時の「談話」と帰国時の「台湾の印象」だけである。

これらのことから、これまでは台湾の夢二に論及する評伝は少なかった。論及した評伝でも、岡崎まこと『竹久夢二正伝』（求龍堂、1984年）は「台湾へ不如意の旅をし身体を一層悪化させて帰る」、上田周二『私の竹久夢二』（沖積舎、1999年）は「事志とたがい、得るところなくますます身体を悪くして帰り病臥」と年譜に書き込んでいるくらいである。関谷定夫『竹久夢二―精神の遍歴』（東洋書林、2000年）は「台湾行の謎」として比較的長い論述をしているが、旅の意義づけはまさに「謎のままである」としている。そのなかで、最近刊の袖井林二郎『夢二・異国の旅』（ミネルヴァ書房、2013年）が、最後のところで「いかなきゃよかった台北へ」と題する補章を加えて詳しく論じているのが注目される。台湾行きについては関谷と袖井の著書から多くのことを教えられたのでまず感謝しなければならないが、ただ、これまでのほとんどの評伝の台湾行をなかったも同じように扱うか否定的にとらえるという傾向は両書にも共通していて、そのことでは私の見解とは異なるし、また袖井が藤島武二と夢二との会話を、武二の回想記を下敷きにして描写しているところには違和感が残る。それはたんに袖井の想像では済まされない、夢二像の核心的なところを語ろうとするものであり、袖井がこれまで論じられてきた多くの崇拜的な夢二像に対して挑戦的に投げかけた問題提起ではないかとも感じられるからである。ここでは、そのほかの最近の夢二研究や、私の調査などを加えながら、袖井の問題提起の検討から始めて、最後に夢二の発言に論及したい。夢二の社会的活動の最後の時期と言えるこの時期の、彼の思想や意識のあり方を明らかにしたいのである。

1. 夢二と武二

台北における夢二と武二との出会いの場面を、袖井は次のように「想像」している。

「昇る武二、沈む夢二」という小見出しをつけ

て、

「よく生きて帰ってきたな」と藤島は言ったかもしれない。夢二は「先生の訪台は何の御用で？」と聞いただろう。藤島は今上天皇の即位を祝う絵を皇太后より下命され、「日の出」をテーマにしたのはいいが、気に入った景勝の地が見つからず、日本の各地を訪ねたあと、台湾にやってきた。「水平線にできるだけ近い新しい赤い太陽でなければならないのだよ」と語った。夢二は心の中で、先生は日の出のように昇り、俺は落日のように沈むのかとつぶやいたにちがいない。藤島の努力はやがて内蒙古の砂漠に上る太陽を描く『旭日照六合』に結実するが、それは1937年のことで、夢二がそれを見ることはなかった（同書 283-284頁）。

史料にもとづいて史料そのものが語らないところをいろいろと想像することは歴史の真実に迫っていくための必須の作業だろう。ことに人の心理などを想像することは一番の困難であるが、それだけに真実を浮き上がらせるために重要である。しかしその作業はつねに、他の史料や歴史事象との関係のなかで解いていかねばならないし、問い返されなければならない。この袖井の想像は武二の回想記を下敷きにしていて、当時の時勢を肯定的に生きている日本の画家たちの姿としては、妥当な想像図と言えるかもしれない。しかしそこに夢二の個性を置いたらどうであろうか。袖井はこのように描くことによって、従来の高く評価されてきた夢二像を批判し、それとは別な夢二の個性を描こうとしたと思われるが、それは武二と夢二のそれまでの関係から必然的に生まれる図であろうか。さらにまた、1930年代の日本及び台湾の状況との関係を考えればどうであろうか。つまり、袖井のこの一節は夢二像に関する核心的な問題提起と言えるのではなかろうか。私のこだわるのは「昇る武二、沈む夢二」とつぶやいたにちがいないという「夢二の心の中」である。袖井のこの問題提起を刺激剤にして、そこでの武二と夢二の関係を歴史的に見定めたい。

藤島武二が訪台した主たる目的は二つあった。ひとつは右に描かれたように、「日の出」の画材を

探すためであり、しかし第一には「台展」の審査委員として招請されてその任務を果たすためであった。まず画材調査の問題から検討しよう。

武二は1928年に岡田三郎助とともに、皇居に飾るための絵画の制作を依頼されていた。彼は「日の出」をテーマにしようとして決めてその準備に取りかかり、画材を求めて内地各地を歩いたが気に入らず、植民地にまで足をのばしてきたのである。台湾について言えば、彼はこの時が初めての訪台で、そのあと35年にもやってきて『旭日』という作品を仕上げている。当時「日本一」高いとされた「新高山」（明治天皇の命名とされる。現在の名称は「玉山」）の日の出を描いたものである。しかし彼はそれにも満足せず、結局37年に内蒙古の砂漠に昇る太陽を描き、『旭日照六合』と題して皇室に献上した。その時に彼は「内蒙古の日の出」という題で「日本といふ文字の現はす日の本の意味からも、国旗の旭日からも、日の出こそは最も日本の国を象徴するに相応しい」³との感想を書いているが、この年、7月7日の盧溝橋事件をきっかけにして日中戦争が全面化する状況の中で、同年12月に完成したこの作品は、大日本帝国の版図拡大の最前線の日の出を国の象徴として描いたということになる。「六合」は天地とか宇宙のことだから、『旭日照六合』という題目は、大日本帝国が世界を照らすということである。皇威を最前線に及ぼす、皇威を人の住まない砂漠にまで、世界あまねく及ぼす図と理解できよう。つまり、33年に夢二と会って台湾での画材調査を話題にした時も、武二の思いはこうしたイメージの線上にあったと言えるのではなかろうか。武二はこの後、日本で最初の文化勲章を受ける。文化人として最高の名誉を天皇から受けるのである。38年には大日本従軍画家協会の成立に関与し、39年には陸軍美術協会の副会長（会長は軍人）として「興亜国策」のために先頭に立ち、小磯良平たち教え子を戦場に送り出すこととなる。彼は1943年に病没した。

ちなみに、武二はこの時期に「日の出」をテーマにした風景画を各地で描いたのだが、高階秀爾は、『日本近代美術史論』⁴で藤島武二を取りあげて彼の生涯にわたる絵画制作を論じて絶賛しながらも、この「日の出」シリーズには一切触れてい

ない。というより15年戦争期については触れていないのである。美術として評価していないと言える。児島馨『藤島武二』⁵は、武二のオリエンタリズムの視点を指摘するとともに、このシリーズについては「この間に描かれた数々の風景画は、自ずと日本の（占領下を含めた）国土を日の出のもとに刻印してゆくものとなった」と、その帝国主義的な意味や戦争責任の問題があることを示唆している。

ところで夢二と武二との関係は古くさかのぼる。夢二が上京した1901年よりも前から武二はすでに有名であった。1891年、明治美術会第3回展に出品した『無惨』が森鷗外に激賞されて以来世間の注目を集めた彼は、1896年に東京美術学校・西洋画科・主任教授の黒田清輝の推薦で同校の助教授に任命されたし、それ以来黒田らが結成した白馬会の展覧会には毎回、意欲的な作品を出して評価を高めていた。しかし、上京した夢二がまず魅せられたのは、その年から一条成美の死後を継いで武二が描くこととなった雑誌『明星』の表紙絵や挿絵であった。ロマンチックなアールヌーボー風の絵画、なかでもその美人画であったと思われる。夢二は独学で画法を習得していたのだが、まだそれを職業にすると決意していない時期から、武二の絵に出会ったのであり、夢二が魅せられてそれを手本に勉強しはじめたのである。夢二が描いた絵を初めて世間に示したのは1905年6月4日の『読売新聞』での「可愛いお友達」というコマ絵であるが、続いて『平民新聞』の継続紙『直言』に戦争批判のコマ絵「勝利の悲哀」などを載せる。同じく『中学世界』に投書してコマ絵「筒井筒」が一等に当選したのが同年6月20日号であったが、そこで初めてペンネームに「夢二」を使ったのである。それは藤島武二の名に似せたと思われるが、それだけ武二に魅せられ尊敬していたと言えよう。武二主宰の白馬会研究所に通ってアカデミックな画法を学ぼうとしたのがこの頃のことである。台北のホテルで、夢二が武二を「先生」と呼ぶのは自然のことだったであろう。

しかし武二が1905年から1910年までパリに留学生として政府から派遣されたこともあって、白馬会研究所へは行かなくなる。研究所で武二とど

³ 藤島武二「内蒙古の日の出」『塔影』1937年9月。

⁴ 高階秀爾『日本近代美術史論』講談社、1972年。

⁵ 児島馨『藤島武二』新潮日本美術文庫、1998年。

のように接する機会があったかわからないが、武二のロマン主義に大きな影響を受けたことは間違いない。しかし、武二の留学以降は、その画風から影響を受けることもなくなったのでないかと思われる。武二帰国の前年、1909年に『夢二画集・春の巻』が出版されて、爆発的な人気を呼び、夢二は自己流の画法でやっていく自信を持ったのである。もちろん彼はその後も絵画制作の研鑽に努めているが、岡田三郎助から、君の絵はもう完成しているというようなことを言われたことも自信になっただろう。武二に学ぶ必要はなくなったのである。もっとも、武二の弟子たち、ことに恩地孝四郎や有島生馬らとの交流があったから、夢二には武二の存在がつねに意識されていただろうが、それはもう世界の違うところにいる偉い先生という意識以上のものではなかったのではないかと思われる。1924年に同棲していたお葉が喧嘩で家出して武二宅へ逃げ込んだ事件が武二の回想に暴露されているが、そこでは「さう云ふ事件で度々私はお目にかかった。さうして私はさう深く交際をして居なかったのですが、夢二君の純な心持と云ふものは、能く諒解して居た一人であると思ひます。あゝ云ふ非常にフアンが多かった事も故ある哉と考へて居ります」と、夢二追悼の場にもかかわらず、彼の画業には一切触れず、「斯う云ふ席上で、お話して宜しい事か、どうか分かりませんが、何かの参考になるんじゃないかと思ひまして」と断りながら、からかい気味に喋っている。「純な心持」というのもってつけたような言いぶりである。この追悼文（スピーチ）にはもう一つエピソードが紹介されていて、それが台北での出会いである。

夢二は展覧会をやるために来たようだが、「所が大分時代も移って居まして、殊に辺鄙な台湾の事でございますし、其頃夢二氏の絵に憧れて居ると云ふ婦人は殆ど見当たりませんでした。反響が少し薄い様な傾きであった」、しかしホテルの前のバーの女給が熱心な夢二ファンだったので夢二に紹介すると、女給も夢二も大変喜んだという話である。夢二人気が衰退していたという話である。また1930年に夢二が「榛名山産業美術研究所」を設立しようとした際に募った賛助会員の一人として、有島生馬とともに藤島武二の名がみられる。おそらく親交厚かった有島が先生である武二に賛

助会員に名を連ねてくれるように依頼したものであろう。回想記を見るだけでも、武二がどれだけ本心から賛同したかは疑わしい。

武二は1896年に東京美術学校の助教授に任命されるが、それは大日本帝国の官吏という性格も持つことであった。そして、1913年に政府から1ヵ月の朝鮮出張を命ぜられたのは、植民地化して間もない朝鮮を、芸術の分野から研究調査して、日本による支配、同化政策の推進を図るための準備を命ぜられたことを意味した。1924年に黒田清輝が死去して、岡田三郎助らとともにその後継者の位置に立った武二は、文部省美術展覧会（略称「文展」、19年から「帝展」、37年から再び「文展」、46年以降は「日展」）の制度改革を求めた1914年の二科会事件で教え子たち若い世代の画家の反乱に直面した時は彼らに同情するところがあったようであるし、その頃彼は「芸術は絶対なる自由性を持っている」⁶と言って、芸術至上主義というか自由主義者的な発言もしているが、結局は「文展」の指導者、すなわち文部省側にとどまっている。その「自由」観念は彼の立ち位置と矛盾することはなかったというべきであろう。国家意識あるいは帝国意識と同居できたのである。その後、彼は帝国美術院の重鎮として国家の文化政策を推進していく中心的な地位にあり続けたのであり、国内のみならず朝鮮美術展や台湾美術展の審査委員に任じられることも、むしろ当然の任務として引き受けていたのである。夢二が台湾で出会った武二は、そうした日本美術界も戦争体制に巻き込まれていくときのその大御所であった。

武二にとって人気衰退した夢二は歯牙にもかけぬ存在だっただろう。だから夢二と美術論議をしていないのであるが、夢二にとって武二は日本美術界の大御所であった。しかしそれは自分とは異質な存在であって、武二と自分とを比較することなど思いもしなかったであろうし、夢二の方も美術論議をする気はなかったであろう。お葉の件では武二に恥ずかしいところを見られている。しかもこの4年前の1929年の日記に、「芸術家であることが誇りだった時代もある。画家たらんとした時もある。今はただ一人の人間でよろしい。累々たる絵を描くシルクハットを被った紋付袴の帝室

⁶ 藤島武二「足跡をたどりて」『空』1915年。

技芸職人のなんと多いことよ」⁷と夢二は書きつけている。その前年に武二と岡田三郎助とが皇室から制作を依頼されているから、そのことが念頭にあったろうことは十分考えられる。ともあれそうした「帝室技芸職人」への批判的な感想は、ヨーロッパへ行ったときに、「地位が個人に魔力を与える、権力」⁸（『夢二外遊記』）と書きつけた、おそらくヒトラー批判と思われるこの文章とつながっているのではなかろうか。権威や権力に対する反感は欧米旅行を経て一段と強められたと思われる。つまり台北では夢二にとって武二は、先生は先生でも、かつての魅力的で尊敬すべき絵の先生ではなかったというべきであろう。武二が「日の出」の話をした時、夢二には「帝室技芸職人」という、かつて自分が使った言葉が脳裏によみがえってきていたのではなかろうか。彼はきわめて複雑な気持ちで武二に相對していたのである。

2. 台湾の美術界

武二訪台の第一の目的は「台展」の審査委員をつとめることであった。さきに朝鮮美術展覧会の審査委員をつとめたことと同じ役割である。

「台展」は、1927 年から始まった。台湾総督府の教育会が主宰する展覧会で、「官展」とも言われ、内地の「文展」と同じく総督府に管理された展覧会である。総督府が台湾美術界を日台一体化、同化の方向へ指導していく中心的な機能を果たす催しであった。「文展」と同じく、その展覧会に出品できるかどうか、そこでどのような評価を受けるかが、その作品の評価となり、権威となり、さらには美術界における勢力・権力とつながっていくのであり、審査委員は美術界の方向を決めて指導していく役割を持っていたのである。

「台展」の審査委員は、1927 年の第一回から、石川欣一郎（1871-1945）と塩月桃甫（1885-1954）が任じられていた⁹。二人とも台湾在住日本人の画家で、石川は台北師範の教師として多くの台湾人画家を養成し、今日でも「台湾美術啓蒙の父」と

と称されている存在で、台湾美術界に大きな影響力をもっていた。塩月は台北一中、台北高校の教師で、その個性的な作品は注目されたが、奔放な性格が誤解されるとともに、戦後になって「自由派の植民教育者」と批判される側面があった。植民地主義者という点では石川の方が絵画教育に熱心で教え子を大事にしたが、それはまた同化教育に熱心であったことにもなる。彼は台湾を去るに際して「台湾の山水美は精神的な考慮を人に与える要素に欠けて居る憾みがある。……快活で享樂的で直情的であるのが多くの台湾人の性格である。山水と同じに表面に現はれたままで内面の精神的要素には欠けるかと思はれる」¹⁰と露骨な蔑視感を書き残しているが、これなどまさに典型的な植民地主義者の認識であろう。つまり彼はそれなりに誠実な日台同化主義者だったのである。塩月は石川と対照的で、自由主義的で放任的な教育をしたようであるが、石川と塩月の関係は微妙で、私にはわからない点が多い。この二人が台湾美術界の重鎮であったが、台湾人の教え子を多く持つ石川の勢力が圧倒的であったという。ところが1932 年 1 月に石川が台湾を去ったので、台湾美術界の勢力バランスが一挙に崩れる。32 年の「台展」の審査委員には石川の後任として初めて台湾人画家・廖繼春が任じられるが、この年の展覧会には石川の教え子たちの作品が採用されなかった。それに対する石川派の不満が高まり、そこには台湾の美術界の混乱をまねきかねない気配が見えた。

総督府は台湾植民地支配 40 年に当たる 1935 年に「始政 40 周年台湾博覧会」の開催を計画していたが、そのためには文化的分野の、そして台湾画壇の、統一した協力を組織する必要があった。31 年の満州事変、32 年の上海事変と続く日中戦争は台湾にも緊張をつくりだしていたこともある。左翼への弾圧が強化され、日台同化政策が強められていった。国語（日本語）教育の強化が叫ばれて、美術界では、33 年に「日・満・華親善政策」の一環として、満州皇帝即位を記念した『台湾風景画帖』が制作されて翌年 3 月に皇帝博儀に献上された。

しかし、1929 年には台湾人の在野の美術団体「赤島社」が結成され、そこには「反旗がはためい

⁷ 1929 年 1 月 16 日。『夢二日記』第 3 巻、筑摩書房、1987 年。

⁸ 長田幹雄編『夢二外遊記・竹久夢二遺録』日本愛書会、1945 年。

⁹ 森美根子『台湾を描いた画家たち』産経新聞出版、2010 年。台湾の台・日の画家たち個々人に関する情報、およびその人たちの発言からの引用は、本書による。

¹⁰ 石川欣一郎「台湾の山水」『台湾時報』1932 年。

ている」と「台展」に対する批判的な動きが報じられ、1930年には「独立美術協会」、33年に「新興洋画展」、34年「台用美術協会」「台湾美術連盟」が結成され、個展も盛んに催されるようになった。内地での流行も直輸入されて、西洋のいろいろな前衛的な傾向も主張され始めた。もちろんそれは日本統治の監視内でのことであるが、石川の影響から解き放たれて「自由」な、あるいは日本支配への抵抗を内に秘めての活動も含めて、多様な運動が展開され始めていた。

そうした状況に危機感をもった総督府文教局は、「台展」の改革を決意し、そのために中央の権威である武二と梅原隆三郎を招いたわけである。武二は梅原とともに、文教局の方針にそって、台湾の「郷土的特色」を主題とする方向と、画法の多様な傾向を認め審査員を「台展」の会員から選ぶという制度をつくるが、日本人画家が主導するという方針が示された。しかし、日本人画家と台湾人画家の対立や、石川派の水彩写生画のグループと塩月派あるいは前衛的諸派とのあいだの抗争など問題は多様で、「台展」に対する批判も絶えず、ことに日本人が主導権を握ることに対する台湾人画家の抵抗は強かった。だが37年の日中戦争の全面化で台湾にも本格的な戦時体制が敷かれ、総督府批判、「台展」批判は封じられてしまう¹¹。

つまり武二の33年の台湾滞在は、戦時下にあって台湾美術界を日台同化の方向に強化する役割をもっていた。夢二は武二のそのような役割について詳しく知る由もなかっただろうが、日台同化の方向についてはすぐ感知できたであろう。したがって、そのような武二の姿を「上昇」している大先生と受け取るような感覚はなかったのではないか。夢二自身に「上昇」志向はなかった。自分の絵画に対する大衆の人気は気にかけていたが、世間における、あるいは日本美術界における名誉や地位や財産の階梯を昇るという「上昇」志向はなかったし、権力への接近はむしろ警戒すべきことであつたからである。夢二の絵には、あえて言えば、日の出よりも夕焼けが、太陽よりも月が、上層の紳士淑女よりも庶民がえらばれた。

3. 夢二のメッセージ

竹久夢二が基隆港に着いた時に『台日』記者に語った「談話」¹²を見ることにしよう。

ドイツの一美術学校教授たること半年、ナチスから追はれて帰朝したと云はるる竹久夢二画伯のナチス説。

私はナチスから追はれたと云ふことはありません。例のユダヤ人排斥で技術・芸術家のユダヤ人が人種的迫害をうけた結果、ドイツの技術も見込みがなくなったので帰ってきました。日本人排斥と云ふことなどありませんが、事実を歪めて通信をやったと云ふのでかうした目にあった例があるさうです。ユダヤ人には技術・芸術家など頭の良いのが沢山をりますが、之等は漸次迫害されて国外退却をしてみますけれど、特例として金融資本家のユダヤ人はなんら排斥を受けてゐないのは資本主義時代の一つの矛盾を示して居る様です。西洋人の複雑した感情はどうも私共にはよくわかりません、ナチスの芸術は今後段々希薄になっていきますが、美術は彼らの生活に大した影響はなくとも、音楽が聞けなくなると云ふことは一番の苦しみだらうと思ひます。

ここでいう「一美術学校」とは、ベルリンにあった「イッテンシュレー」のことで、スイス人ヨハネス・イッテンの主宰するバウハウス系統の美術工芸学校である。これについては、夢二がここで日本画を教えていたこと、その教え子は9人いてそのうちユダヤ人が7人いたこと、そしてこの学校は6月27日にナチスの突撃隊に襲撃されて廃校にされたこと、夢二もそのため職を失ったことを指摘するだけにとどめたい。職を失い他に収入のめどが立たなかったし、ナチスのユダヤ人迫害が教え子たちに及んだので、彼もドイツを去ることにしたのである。おそらく教え子たちのために彼がドイツ脱出の手伝いをしたこともあったであろう。それについては夢二研究者の間に夢二がユダヤ人救出運動にかかわったかどうかについての論争があるが、それは別の機会に論じることにする。ここでは夢二のドイツからの脱出にはユダヤ

¹¹ 黄琪恵『戦争与美術・日治末期台湾的美術活動与絵画風格(1937・7-1945・8)』第1-3章、1997年、国立台湾大学芸術史研究所。

¹² 竹久夢二「談話」『台湾日日新報』1933年10月27日。

人問題が深くかかわっていたことを確認すればよいだろう。インタビューした記者はそのような事情を知っていたわけではないが、時代遅れの古臭くなった画伯から絵の話聞くよりは、当時世界中で議論になっていたナチス問題に焦点を絞ったと思われる。夢二が教鞭をとっていた学校がナチスによってつぶされたので夢二はドイツをはなれたということは、法的には追放でなくとも実質的にはそうであり、そういう噂が日本に伝わってもやむをえなかったであろうし、記者がその点に強い好奇心を持ったのも自然である。しかし夢二にとっては不愉快きわまりない噂であり、ユダヤ人救済のことが分かればどのような被害が教え子たちに及ぶかもしれない。少なくともその点について語ることは危険であると夢二は思ったのでないか。夢二は、まず「ナチスから追われて帰国した」という事実を否定する。それは自己防衛のためにもことわっておかねばならない。そして、ナチスによってユダヤ人に対する人種差別、人種的迫害が行われている事実は確認している。彼の日記には、「技術・芸術家のユダヤ人」のみならず、ユダヤ人全体が迫害されていることが記されているのだが、なぜ技術・芸術家に特定したのか。イッテンシュレーが廃校にされたことが強烈な記憶であったためであろうか。「ナチスの芸術」の「希薄」化＝崩壊の予測は彼の体験からでたのである。しかし、ナチが政権をとった当初の日本では、さらに欧米ではともいえるが、ナチスの政権奪取とユダヤ人への暴力的な迫害は、多くの人々の非難を呼び起こしていた。日本のジャーナリズムでもこの時期は、少数のナチス擁護論者を除けば、多くの知識人がユダヤ人迫害と独裁的政治についてナチスに対する非難の論陣を張っていた。だから、その現場にいてその状況を見てきた夢二は、もっと明確に、もっとリアルに、ナチス批判を展開できたはずであるが、その点きわめて生ぬるい穏やかな表現で、日本の知識人たちのナチス批判に比べれば物足りないといわざるをえない。そこには、インタビューした記者が夢二の話を要約するときには切り捨てたり表現を修正したりした部分もあっただろうが、夢二自身にもそう表現せざるをえない事情、そう表現してしまう事情があったのである。

彼はベルリンからの帰国の途次、「戦闘ファッシ」

の黒衣隊がナチスの突撃隊のように暴れまわっているイタリアを経過してきたということもあろうし、日本のマスコミにおけるナチス論議、ナチス批判の言説に、ほとんど接していなかったということがあるのでないかと私は推測する。日本に帰国後の1か月の間、旅の疲れで寝てばかりいたということもあろう。新聞を見たとしても、ナチスについては、ユダヤ人と有色人種を排除する政策を打ち出したので、日本人も排除される恐れがあるという報道があり（『朝日新聞』10月20日）、他方国内では、すでに小林多喜二の警察による虐殺事件（2月20日）は知っていただろうが、かつての友人神近市子が数日前に検挙されたことも衝撃だっただろう。そして彼が目にした新聞には、「転向の佐野・鍋山をコミンテルンが処分……わが国内の左翼陣営は根底より揺らぎ……」（『朝日新聞』9月22日）という報道が踊っている。この頃の彼は左翼運動とは全く無関係であったが、彼のトラウマを刺激するには十分のニュースであろう。つまり夢二は権力やマスコミに対してかなり臆病になっていたのではないと思われるのである。彼には、国家のでっち上げた大逆事件で死刑に処せられた幸徳秋水らへの思いとその後彼に張り付いた刑事の尾行・監視という体験があり、それがトラウマとなって彼を臆病にしてきたという問題がある。そのようなトラウマを想定することで複雑な臆病の問題も初めて解けるのではないか。そして、ベルリンにおけるユダヤ人に対する暴力的な迫害の見聞、なによりも彼自身のうけたイッテンシュレー廃校の被害も、そのトラウマを強烈に呼び起こすことになったのではないか。にもかかわらずユダヤ人迫害の事実とナチス崩壊の予測を、生ぬるい表現ながらきっちり指摘していると言っているのではあるまいか。

次に、帰国間際のエッセイ「台湾の印象」¹³を見てみよう。

「台湾の印象—グロな女学生服—竹久夢生」という見出しのもとに、

二十五年型シボレイは呼吸をきらし切らし
四十哩を出したが、基隆の裏山まできてへた
ばって終った。四時八分前！わが乗るべき扶

¹³ 竹久夢二「台湾の印象」『台湾日日新報』1933年11月14日。

桑丸はもう八分を待たずして出帆するのである。吾々の自動車は「もうどうにも走れない」といふのである。丘の上までゆけば扶桑丸の煙が見えるであらうといふ。

私は、この小高き丘の上で、友人に挨拶する間もなく倉皇と立ってまた台北の方を望み、また遺憾なる煙をあげてゆく扶桑丸を眺めやる。しかし私は山の形や岬の方は見ない事にする。そこはやかましい要塞地帯で、私が絵かきだから、制服を着た人間に心配掛けないためである。

私は丘の上で思ふ。何故なれば、次の船の出る日まで充分思ふ間があるからである。私は何しに台北へ来たか。私は台北で何を見たか、私は台北において何であったか、或は無かったか。かういふ主要な問題をやっと考へる時間を持った。

* * *

「台湾には生蛮人と制服を着た日本人が居る」さういふのが私の台湾に対する人文地理学であった。その他に何があるのか、私は知る必要もなかったから、考へても見なかった。つまりこちらでいふ本島人がゐることに気がつかなかったのだ。しかしこれは笑へない。多くの日本人はいつの間にか、本島人の居ない台湾を知るに過ぎなかったのではないか。その寄ってくるところはその政策のためか、感情か、私は知らない。急に本島人が山の中から出てきた見たいに言ふ人があるが、なるほど、来てみると本島人も居るが、制服を着た人間も随分居るのには驚いた。

後藤新平の予言が果たして卓見になるかどうか、次の船が出るまでに解るものではない。

* * *

本島人はせっせと日本語を勉強せねばならないだらうが、日本人もまた本島人の住宅と衣服に就いて学ぶべきものがあると思ふ。ことに台湾に生活する時に於いて。つまり台湾の風土に適應するために、およそおかしきものは台湾に於ける女の学生の制服である。ああいふ帽子は——さうだあらゆるグロテスクな俗悪醜惡な形容詞をつめこんでもまだ一杯にならないであらう。

「汽車に注意すべし」といふ立札の（に）

を（も）に書き換えて「汽車も注意すべし」とあった。この浅いおかしみが、この無邪気な作者に理解されてゐたのではない。

* * *

優秀な人種だと考へることの出来る人種だけが優秀なのである。私はまた少し眠くなった。（八年十一月十一日）

夢二は台湾を去る間際にやっと、「私は何しに台北に来たか、私は台北で何を見たか、私は台北において何であったか」という問いを思い出している。それは彼が明確な目的意識なしに、ただ絵を売って資金をえたいという思いだけで来たことを物語る。台湾をまともに観察しようという姿勢が持てなかったのである。にもかかわらず何か言わねばならない思いはあったのだろう。しかし、絵がさっぱり売れず、しかもその作品五十数点が行方不明のままである。滞台中に台湾のスケッチをしているはずだがそれも見当たらない。ともかく夢二は最大の目的が達せられなかった。大失敗である。しかし、台湾の新聞社に送る原稿にそのことは書けない。台湾にいる、せめて夢二ファンであってほしい日本人あてのメッセージをどうするか。せめて「私は台北で何を見たか」を書かねばならない。記者からの依頼にどうこたえるか、彼は四苦八苦したに違いない。それが、このメッセージを読む人によってはくだらない散文、女学生への悪口、と受け止められても致し方がないものにしたと思われる。実際、これまでにこれを問題として取り上げた研究者はいない。評伝に彼の台湾旅行が無視されるのもこうしたことによるだろう。

にもかかわらず、このメッセージには二つの興味深い問題が提起されている。一つは台湾には「生蛮人と制服の日本人だけ」という「人文地理」しか知らなかった自分に対する反省である。とともに、多くの国内の日本人は台湾をそのような目で見ていたのでないかと、植民地に対する国内日本人の無関心と支配者としての偏見と傲慢を問うているのである。「本島人」つまり漢族系住民のことが視野に入っていない。しかし彼が台北の街を散策した時に出会ったのは殆ど本島人であり、彼らを日本人が蔑視している風景である。人口的には圧倒的なのだが、その存在を無視している。平定

した存在は無視できるが、「生蛮人」（少数民族原住民に対する蔑称）は抵抗的で理解しがたい野蛮な存在とみなされて注目されている。「その寄ってくるころはその政策のためか」と、それとなく植民地政策に対する批判を漏らしているのである。

だからまた、「制服の日本人」つまり役人・警察・軍隊の存在が圧倒的だということになる。「やっかいな要塞地帯」もまた権力的、暴力的支配のイメージである。この文章では要塞に触れる必要もなかったのに、わざわざそれを取り上げているのは、その問題に注意を呼びたかったのであろう。夢二は台湾をそのような「人文地理学」に安住している日本人、およびそのように安住してしまう状況を批判的に見ていて、それらに対する彼の嫌悪感が読み取れる。

あと一つは、「女学生の制服がグロテスク」という問題である。女学生の問題を論ずるところに夢二の特徴があるという人もいるだろう。果たしてそうか。彼を連れてきた河瀬蘇北は、何度か台湾に来ていて、その2か月前には、『台日』に8回にわたって「台湾素描」を連載している。いわば彼の台湾紀行といったものだが、その観察は当時の植民地主義者のなかでも冷静な観察であり、台湾認識としては優れた部類に属すると言えよう。そこに「婦人の服装」という項目があって、「台湾婦人の服装の、著しく清潔となり明るさに富めることにビックリした。……孰れも洋装に近いスカートの支那服で、その柄といひ、かく構（格好）と云ひ頗るスマートでした。……総督府で別に服装改良を提唱した譯でない」と云ふから、全く自発的です。文化の低い台湾人、生活程度の低い彼等に、自発的に而も婦人に、斯かる現象の興ったと云ふのは、抑も何か。台湾にいる内地人の多くは、この話をしても「はアさうですか」と誠に無関心だ。恰も台湾人の風俗などは、我々の問題外と云った態度だ。そして台湾の首府台北で見るところの、日本婦人の街頭進出風景は、丸髷にアップパ、さらに御丁寧に下駄と云ふ、生蛮人すらも眉をひそめさうなグロテスクなものです。彼我対照して一考の価値なきや否や」と問うている¹⁴。大変率直で、台湾人の衣服を観察してほめるなど、日本の植民地主義者の無知と傲慢をいさめている

のである。

夢二はこの「台湾素描」を蘇北から読まされたにちがいない。初めて訪台の夢二に、台湾案内のつもりで見せるのは自然だろう。彼に見せられなくとも2か月前の新聞だから、充分時間のあった夢二は日本語に飢えていたはずで、この文章を読んだにちがいない。そしてそこから植民地事情を批判的に学んだと思われる。夢二の服装に関する観察は、蘇北とそっくりで、「グロテスク」という表現も、蘇北を真似たといえよう。ただ「日本婦人」でなく「女学生」にし、「アップパ」でなく「制服」にしているところが違う。

1920年代に日本製の洋服・アップパがつくられて大流行していた。腰にベルトのない身体に拘束感のない服なので、中間層から庶民層の女性にまで広がった洋装である。内地の流行はすぐ植民地に広がる。1937年の調査では、女性の洋装の普及率は東京で25%だったが、植民地の大都市ではずっと高く台北は46%だったという。つまり台北では日本婦人の半数が洋装で、その中の多くがアップパということになるから、それだけにアップパは目立った風景であっただろう¹⁵。しかしアップパは総じて男性たちに不評であった。

蘇北のように、在台日本婦人と台湾人婦人と比較して日本婦人を批判した方が、「女学生」をとりあげるよりも呼びかける対象が広範で、説得力があり、そのインパクトも大きかったと思われる。にもかかわらず夢二が蘇北よりも一歩突き出ている点は、蘇北が「一考の価値」があるで終わっていることに対して、夢二は台湾人に学ぶべきだとしている点である。「本島人の住宅、衣服について学ぶべき」というのは、女学生だけでなく、服装だけでなく、生活全般にわたる問題として提起していると理解すべきだろう。そして、その問題は夢二が1930年に「榛名山産業美術研究所」設立を構想した時以来の持論でもあった（ウィリアム・モリス以来の民衆芸術運動が1920年代には多様な運動となって世界に広がり、日本でも多様な活動がみられた。それと夢二との関係については、また別に論じたい）。その時の宣言文には「吾々の日常生活の必要と感覚は、我々に絵画・木工・陶工・染織物等々の製作を促すだろう」とあり、日

¹⁴ 河瀬蘇北「台湾素描3」『台湾日日新報』1933年8月11日。

¹⁵ アンドルー・ゴードン『ミシンと日本の近代』みすず書房、2013年、第3章、第5章。

常生活全体が、産業美術との関連でとらえられているのである。さらに台湾行の直前に書かれた文章も、「私はその頃、不用意にも自分の図案した浴衣を婦人に着せることを言ったが、これは実に馬鹿げた低徊趣味であった。この踊りに適当な服装が作られるならば、それは直ちにこの時代の地方的服装が決定するのである。すべての服装は個々地方的であるべき筈で、各々の生活が服装を決定するからである」¹⁶も思い出すべきであろう。彼はあくまでも地域の生活と結びついた衣服（と住居）と、その上に生れる美術を考えていた。「日常生活の必要と感覚」にもとづくこと、それはイッテンシュレーにも流れていたバウハウスの問題意識でもあった。そして「低徊趣味」だったと自己批判しているところに夢二の飛躍がうかがわれる。民衆自身による民衆文化を考えていたのである。民衆を主体性を持った存在だと考えているのである。したがって学ぶべきというのは、日本人も台湾民衆に学んでつくるべきだと言っているのである。蘇北のように「台湾人の文化が低い」と平然と言っている視点からは、台湾人に学ぶという発想は生まれにくい。まして台湾人の日常生活を内在的に理解しようという姿勢は生まれないであろう。つまり日常生活から日本人と台湾人とを対等にとらえ、台湾の地方的特色を内在的に理解して学ぶという夢二の視点が注目されるのではなかろうか。

それにしても、夢二が台湾からの去りぎわに残すメッセージに、なぜ「女学生の制服がグロテスクだ」ということだけを語ったのか。しかも、夢二にしては強すぎる、「あらゆるグロテスクな俗悪醜悪な形容詞をつめこんでもまだ一杯にならない」という、それこそ女学生に投げかけるにはふさわしくない形容の仕方で罵倒しているのはなぜか。蘇北とちがって夢二が言いたかったのは、「女学生」が問題なのではなくて、「制服」が問題だったのではないか。彼は台湾の日本人といえば「制服」と言えるほどに「制服」が多いことを強調し、それに反感を示している。彼には、本島人に対して尊大にふるまう日本人はみな「制服」に見えたのかもしれない（すべての日本人がそうだったわけではない）。「制服」＝権力によって支配されている

台湾植民地に大きな違和感を持つことになったのではなかろうか。

そう考えると、この文章の後に突然に、「汽車に注意…」という文章が出てくることの意味が分かるだろう。「汽車に」を「汽車も」と書き換える問題は、「女学生の制服に」でなく「女学生の制服も」と言い換えることができるというサインであり、「その他の制服も」グロテスクだということである。一般の読者も、初めは戸惑い、そして、これは夢二のサインなのだと気付かされたことであろう。そして、制服のみならず「住宅、衣服について」も、その制服的なもろもろの問題が、そこに含意されていると言えよう。

私の強引な憶測をあえて言うならば、夢二が日本人女学生の制服のグロテスクを強調する時、彼が見た「台展」の作品を思い出していたのではないか、というよりも、武二が関係する「台展」への表立った批判を遠慮して、その代わりに台湾の風土に似あわない日本人女学生の服装をグロテスクと批判したのではなかろうか。彼の画家としての直感がそこに示されているのでないか。『台展』の作品群は、たしかに台湾の郷土色を描こうとする点で共通していたが、郷土色の重視は総督府の、日本政府の要請であり、それにはまた日本的手法による指導も強調されていた。日本人の西洋文化の摂取が生んだ日本的手法はそれなりに意味あることであるが、台湾の自然を、台湾人の感性を、日本人画家も台湾人画家も、内在的に理解し、自分のものとし、そこから生まれる画法を駆使したものではないところが問題なのである。台湾にとって日本的手法での統一は「制服」なのである。夢二が日本人女学生の洋装が、台湾の自然や台湾人の衣・住を内在的に理解しないで、日本的な流行をそのまま持ち込んだところの不自然さを示す事例として指摘していることは、実は日本人画家も、日本人画家に指導されたり日本に留学したりした台湾人の画家も、日本的な画法をそのまま使っていることに通じる。そういう意味では、台湾人に対しても、台湾人画家に対しても、彼はそのメッセージを届けたかったのかもしれない。

そのように考えると、「後藤新平の予言」ということについても、夢二は何を言いたかったのか。後藤が民政長官として8年間滞在し、児玉源太郎総督と二人三脚で台湾の近代化政策に取り組んだ

¹⁶ 竹久夢二「旅中備忘録」1933年10月21日（長田幹雄編『夢二外遊記・竹久夢二遺録』）。

時の発言を指しているようだが、私はその「予言」が何か特定できない。後藤には台湾についての予言らしき言説は沢山ある。しかし夢二がそのことについてどれほどの知識を持っていたかは疑わしい。夢二が台湾に来て聞き知った「予言」の可能性が大きい。台湾在住日本人が日本統治のすばらしさを称揚するのに、児玉と後藤との統治法が必ず引き合いに出されたであろうことは、容易に推測することができる。後藤の台湾での功績は今日でも高く評価されているが、その一つに、台湾人の生活慣行を調査して、それを尊重しながら近代化を進める、日本国内の法律をそのまま画一的に適用しない、という民心慰撫策があげられよう。これは夢二の地域の民衆生活にもとづいた美術という発想に似ている。しかし、夢二はそこから自分のデザインを撤回して民衆自身の創意にまつべきだったと反省しているが、後藤にはその反省がなかった。なぜなら、それは民心慰撫という政治目的のための手段だったからである。後藤は、大日本帝国の植民地政策によって列強による植民地のなかでも最高の楽園（植民地として！）を実現したいという願望があった。後藤の政治があったから現在の台湾の成功（予言の実現）があるという在台日本人たちの言説に対して、夢二は「後藤の予言が果たして卓見になるかどうか」と、予言がまだ成功していないかのように扱っている。それは、台湾統治における欠陥の最たるものが「民衆の創意」に基づくものでなかった点にあることを感じとったからではないであろうか。

このメッセージは、末尾に「優秀な人種だと考へることの出来る人種……」の言葉が、何の脈絡もなしに突然に示されて、彼は眠りにつく。無責任な終わり方である。しかし、これはそれまでの文章全体を受けた結語として読むのが自然であろう。そこで夢二は何を言わんとしたか。この皮肉な人種差別主義、選民意識を示す成句は、もちろん肯定的に提示されたものでないことは明らかである。それが、ナチの選民意識か、ユダヤ民族のそれか、ヤマト民族のそれか、それとも諸民族にしばしばみられる現象か、であるが、夢二の場合はナチズムに対する批判意識が強かったからまずナチス批判を込めて書かれたということは容易に察することができる。それ以前の文章の「制服」とのつながりで考えれば、夢二がベルリンで経験

したナチス突撃隊のグロテスクな「制服」（鉄兜や卍の腕章・国旗）が人種差別主義の象徴のように思い出されたと言えるのではあるまいか。とともに、彼がナチ権力の暴力性に触れる時に、日本についての心配をすることがよく見られる。ベルリンにいた3月21日の日記に「避雷針のついた鉄兜をきたヒットラアガ何をしでかすか、日本といひ、心がかりではある」と書いているが、この「日本」は日本政府のありようのことである。ヒトラーと比べているのである。こうした思考の仕方では台湾の夢二を考えれば、「制服」がナチであるとともに日本＝台湾総督府であり、台湾人を差別している、台湾人に対する日本人の優越感がグロテスクであるとしているように読める。日本人の選民意識が台湾人を差別している、という告発のようにも読めるだろう。彼は台湾入国時の「談話」では、「西洋人の複雑した感情はどうも私共にはよくわかりません」と言っている。西洋文化と東洋文化、あるいは日本文化との違い（相互理解の困難）を口実にして逃げている。しかしここでは、ナチスの制服「も」日本の制服「も」同じだ、人種差別主義では同じだと言っているのである。夢二の飛躍ではなかろうか。「眠くなった」夢二が見た夢は、関東大震災下の在日朝鮮人、アメリカの日本人移民、ベルリンのユダヤ人、そして台湾の人たちの顔が走馬燈のように巡り、その背景には「制服」たちと帝国意識に囚われた民衆の姿があったのではなかろうか。

おわりに

竹久夢二が最後の旅で何をしたか。今日残っている史料では、展覧会と二つのメッセージしかない。展覧会は批評家から好評を得たが、期待した夢二ブームは起こらなかった。しかし、この展覧会がごく少数の人にしか触れなかったとしても、彼の「人間情熱」のある絵画が台湾の人々に新鮮な刺激を投げかけたことは否定できないだろう。その後の台湾の美術界に影響があったかどうかを追跡できないこともあるが、ここでは、展覧会は全く無意味ではなかったことだけを指摘しておきたい。しかし、帰国後、日記に、例によって他人事のように台北で詐欺にかかった商人のエピソードを書きつけているが、展覧会に出品した作品はあまり売れず、そして作品のすべてが誰かによっ

て持ち去られた。詐欺にかかった。彼は呆然とするしかない。

にもかかわらず、彼は去り際に台湾の人たちにメッセージを残したのである。それは、一つは人種差別に対する反発であり、一つは権力的なものへの反発と民衆的な文化への渴望である。人種差別に対する反発は、最初のメッセージ「談話」に通じるもので、それが台湾に来て、台湾にも存することを言い残したかったと言えるだろう。「グロテスク」に対する罵倒は、人種差別に対する批判に集約されたのである。権力的なものが人種差別を行っているのである。人種差別への批判の目によって、彼の視野は自国の植民地にまで広がったのである。西洋対東洋の「感情」のあり方は、東西に共通する問題に広げられたのである。またその「制服」から脱して民衆自身による創造からなる民衆文化への渴望は、「榛名山産業美術研究所」で果たそうとした彼の夢であり、台湾に来ていよいよ求められる仕事と痛感されたのではなかっただろうか。したがって、このメッセージは台湾の在台日本人のみならず台湾人にも向けられたメッセージであったと言えよう。台湾人が営む日常生活を母体とした、台湾人が主体的に創る文化こそ基本であるという見通しが示されたのである。台湾に来ることによって夢二の感性や直観力は広がり厚みを増し、一つの飛躍を持ったのではなかっただろうか。しかし、この可能性の芽生えも、帰国して、肺結核と診断されて入院、肉体の衰弱を前にそれを追求し育てる意欲が絶たれてしまった。彼は翌年の9月1日に命を終えた。

以上の議論は、私が夢二の可能性を事実にもとづいてできる限り発見したい、大事にしたいという「願望」からくるものである。そこに、偏り、事実との乖離があるかもしれない。彼がもったであろう可能性は、あくまでも感性とか直観力の領域においてであって、思想の体系とか理論の領域にまで彼に期待したものではない。ただ、私が「トラウマ」の仮説によって「想像」を広げていこうとしているところに、事実と想像との乖離の危険性を感じられる向きもあるだろう。それは、事実や彼の言説を讀解・分析する私の作業のあり方を検討してもらえないが、さしあたって、いま私が提示できる夢二像として受け取っていただければ幸いである。

夢二は理論家ではなく、体系的な世界観の所有者でもない。彼は何よりも感性の人であり、美意識に生きるアーティストである。だから、ユダヤ人理解や資本主義理解や、後藤新平理解や等々に、偏見や誤りがあつたとしても、それで彼の議論が無意味になることはないだろう。それにしても、大正期に大きな社会的影響力を発揮した夢二の仕事は、関東大震災以降次第にその人気を弱めていったけれども、この最後の旅でも、彼は彼の感性において、弱者へのまなざしを、民衆の文化への期待を、もち続けた。そして台湾でさらに一步前にそれを推し進めた、と言えるのではあるまいか。それは彼の死によって遮断され、作品に結実することはなかったが、そのような彼の感性のあり方が戦後の夢二ブームの再来とふかく結びついているのではあるまいか。

最後に、中国人による夢二摂取について触れておきたい。近代中国における芸術分野の啓蒙家・豊子愷のことである¹⁷。中国の文人画家・豊子愷は西洋美術を勉強するために1921年の春に日本に留学し、10カ月間滞在して帰国する。その間に彼は日本語とともに絵画と音楽を学び、絵画では黒田清輝らから西洋画を学ぶが、なかでもミレーやゴッホの東洋風なところに魅せられたという。しかしそれ以上に夢二から大きな影響を受ける。子愷が夢二に魅かれたのは、夢二式美人画ではなく、平民新聞時代の夢二、『夢二画集』春の巻などの初期の作品である。彼はそれらを「構図は西洋的だが画趣は東洋的であり、西洋と東洋の画法の融合が成功的に見られる」と評していて、そこに中国文人画の伝統との連続性を見出すとともに、それからの飛躍、中国近代化の方向を見出したのでないかと思われる。なかでも、「夢二の略筆画(漫画)は私に社会の不平等と人生の悲哀を感じせしめた」「私は夢二に倣って、題が同じで材が異なる絵を描いたことがある」という回想があるが、「社会の不平等」に対する敏感な感性を夢二から受け取ったところが注目される。その意味で夢二の感性はアジアの人々とも共有しうる世界をつくり出す可能性があつたのである。そして豊子愷は、1937

¹⁷ 豊子愷については、すでに陸偉榮「豊子愷と竹久夢二」『月刊しにか』2001年6月と西槿偉『中国文人画家の近代』思文閣出版、2005年の研究があり、本稿はそれに負っている。

76 台湾の夢二

年、夢二から学んだ「漫画」の手法をもって、抗日戦の宣伝活動をするように、中国の画家たちに呼びかけたとされる。これは私の想像からする期待であるが、夢二が台湾に滞在していた時に、上海で豊子愷は活躍していたのだが、夢二を手本とした豊子愷を知っている多くの教え子たちのなかに、夢二に会いに来た画家がいた可能性は高い。今後の研究にまちたい。

(ひろた まさき)